

アフリカの人々と名付け 28

名前の近代化とキリスト教化

小馬 徹

西欧文明、キリスト教、近代化

文化人類学の視点を採り入れ、初めて複数の文明の歴史として世界史を描いたA. トインビーは、16世紀のユーラシアには西欧、ビザンツ、アラブ、ヒンドゥ、中国、ならびに極東の諸文明が並立し、それぞれが世界の中心を自認していたと考えた。中心に位置して最も覇権に近かったアラブではなく、西の隅にあった西欧が世界を制覇したのは、科学技術の文明を発達させたからだと言っている。後にI. ウォーラストンは、西欧文明が覇権を握る近代を、世界システムとしての資本主義が全地球を飲み込んで行く過程として捉えた。

その科学と資本主義を生み出したのは、キリスト教の風土である。神の言葉（ラテン語）で書かれた第一の聖書（the Book of Scriptures）と、神の創造の御業を刻んだ第二の聖書（the Book of Creatures）を同時に読むという営みが、その風土を特徴付けた。G. ガリレイは、自然という書物（第二の聖書）は数という言葉で書かれていると言った。それは、自然の本質を数学として記述するという近代科学のあり方を実に見事に言い当てていよう。

だから、近代化は西欧化であり、西欧化がキリスト教化であった側面は否みがたい。アフリカの人々の名付けの変化を考える時にも、キリスト教の巨大な影響を無視できない。

名前と能率

社会人類学者リーンハートは、何であれ苗字化した名前が単独の個人名を系譜的に連鎖させる伝統に取って代わりつつあるアフリカの状況を、中世の英国に準えている [Lienhardt, G., "Some African Personal Names" JASO (19) 2,

1988]。前項の歴史観を勘案すれば、より大きな視点からそれが納得できよう。

英国庶民の苗字の成立は、英国のキリスト教化の進捗ともかなり並行的である。異教の神々の名前を個人名とする事を禁じたのは、キリスト教会初の総会義である325年のニケーア公会議だった。16世紀の英国国協会は、この禁止事項を更に強化して、異教的な起源をもつ名前、即ち非キリスト教的な名前の使用を禁じた。

高名な社会人類学者Edward Evan Evans-Pritchardsの名前にもこの事情の一端が窺える。Evanは、「エホヴァは優美なり」を意味するヘブライ語の名前Johnのウェールズ語形であり、EvansはEvanの息子を意味する。現在のアフリカの経験は、かつての英国の経験でもあった。

リーンハートは、スーダンの牧畜民ディンカを例に引いて、アフリカの伝統的な命名法が官僚的な一覧表化に適さないと指摘する。自分の名前の後に父と父系の祖父の名前を連ねるディンカの伝統的な名前は、Ding Deng Ding, Ding Deng Deng, Deng Deng Ding, Deng Ding Deng, …などと紛らわしくなるからだ [Lienhardt, *ibid.*]

植民地行政は、税の徴収を初めとする管理を徹底するために二名式の個人名を制度化し、個人を登録した。それには、植民者たちに馴染みの名前の方が都合がよい。現在でもケニアのキプシギス人は、周辺の諸民族よりもキリスト教徒の割合が低い。それにも関わらず、余程の高齢者を除くほとんどの人が西欧的な個人名を持っている。これは、キプシギス人が近代化の「東アフリカの手本民族」と目された事実と無関係ではない。洗礼名の受容は、キリスト教徒化以前に、植民地という新たな社会空間で或る役割を認知される事に繋がっていたからである。

英会話とスワヒリ語の授業

ここで思い出す事がある。私の高校には、ハングマンという怖い英会話の先生がいた。彼は最初の授業の初めに、籤のように折り畳んだ小さな紙片を選ばせ、一年生の一人一人に英語名を与えた。私はゲーリーというキリスト教臭くない名前を貰ったが、聖人名を貰った友人も多かった。真宗の寺の息子である級友もその一人だったが、ハングマン先生が怖くて、いやだとは言いだせなかった。先生は、英語に馴染んで欲しいためだと言ったが、何時まで経っても生徒の本名には興味がなかった。

ずっと後年、一カ月ほど集中的にスワヒリ語を学んだ。ザンジバル人のワズィール先生は、受講生の名前が覚えられないし、スワヒリ文化の理解にも役立つと、皆にスワヒリ名を与えた。全てがイスラム教の聖人の名前だった。私は予言者ムーサの名で呼ばれ、面映くて仕方がなかった——英語風に言えばモーゼだから。

文化表象としての名前

私の経験は、寓意的な意味で、アフリカ人が植民地下で洗礼名を受容する状況の一つの側面の理解に役立つ。英語名を拒否すれば、ハングマン先生に睨まれる。また、事大的な名前が嫌でも、社会人類学専攻の大学院生であった私には、文化も学べというワズィール先生の促しは拒みがたい。つまり、名前を受け入れる事がその状況では地位を獲得する絶対的な前提条件だったのだ。

ここで、顔見知りのキプシギスの老女がある日突然エリザベスと自称し始めて私を驚かせたエピソード（連載第16回）を思い出して欲しい。彼女がそうしたのは、キリスト教に改宗したからではなく、近隣の女性自助組合に参加したからだった。キプシギスの老女が洗礼名（と考える名前）を名乗るのは、大概はこのような場合である。つまりそれは、老女が現代の社会的脈絡に参入した事の文化表象なのだ。

名前と二つの世界

リーンハートは、ディンカでは、学校教育の過程で数多くの者が洗礼名を得つつあると報告している [ibid]。この事態は、非イスラム圏アフリカ各地にも当てはまる。だが、それがそのままキリスト教化の程度を表してはいない。

ディンカにキリスト教が伝わってから、ほぼ3世代の時を経た。もし、ある男性が生まれて間もなく貰った個人名がBolであり、父親の名前がDingであれば、父称を付してBol Dingと呼ばれるか、あるいは去勢牛名か渾名で呼ばれるのが伝統だった。だが、今日学校教育を受けた男性であれば、John Dingのように名乗るのが普通になっている [ibid]。

ただ、ディンカでは、今日でも洗礼名は決して父称にならない点に注意する必要がある。つまり、John Dingの父親の洗礼名がEdwardでも、息子はBol EdwardとかJohn Edwardと呼ばれる事はない。言い換えれば、洗礼名はキリスト教会や学校との関係を意味する重要な指標と考えられながら、歴史や系譜の上では余分であり、どんな意味も与えられていないのだ [ibid]。

それは一体なぜか。洗礼名は、ある個人が、先祖のほとんど知らない世界に部分的に同化している事を意味する反面、ディンカ人としての個人史や社会的人格のそれ以外の側面は何一つ伝えないと考えられているからだ [ibid]。

リーンハートのこの見方は、そのままアフリカ全体に当てはめる事ができる。この事態は、奴隷としてアメリカ大陸に送りだされた人々の子孫、即ちアフリカ系アメリカ人とは全く異なっている。アメリカの黒人たちが今日では白人と名前の上で区別が付かないのは、単に彼らがキリスト教化した結果ではない。彼らがアフリカの伝統を遠く離れてから長い時間が経ち、今やアメリカを一つの世界として白人と共有しているからに他ならない。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）